

令和3年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(学校推薦型選抜 I)

小 論 文

(地域学部 地域学科 地域創造コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙（横書き）に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

地域づくりや福祉活動、被災地域の復興等において、ボランティアが果たす役割は大変大きなものとなっている。そのボランティアについて書かれた次の文章を読んで設問に答えなさい。

見返りを求めない行為を、われわれはときどき見かける。電車のホームから誤って落ちた子どもを救おうと、電車が迫ってくるのに自分の身の危険をかえりみず線路に飛び降りるといった人のことを新聞で目にする。そういう場面に遭遇したら、「すばらしいこと」、「勇気あること」と称賛したい。しかし、いつもそれを期待することはできない。

通常の人にとって、純粋に利他的な行為は、日常的な活動の一部としてではなく、たまたま自分にそういう機会が訪れたとき、結果としてそうしていたと気づくといった性質のものであると思う。日常の社会関係の要素として人の行為を「モデル化」して考える場合には、われわれは必ず何かしらの「報酬」を期待して行動するのだと想定するのが無理のない、納得のゆくアプローチだろう。

「ボランティアってのは、自分にとって一銭の得にもならないことを一生懸命やっているみたいだ。だから、ボランティアは偉い、感心だ。こんなふうにいる人は好意的な人だ。その気持ちが少し皮肉な側に傾けば、ボランティアは「変わった人だ」、「物好きだ」となるかもしれないし、反発心が混じれば、ボランティアは「偽善的だ」となりかねない。

「偽善的だ」と言われたとき、ボランティアは考え込んでしまうかもしれない。自分がしていることが「見返り」を求めない「尊い」行為だと言う自信はない。もしかすると自分は、自分の力を誇示したいだけなのではないか、弱いものと接することで優越感を感じたいだけではないか、「こんないいことをしましたよ」と周りの人に自慢したいだけなのではないか……と考えだすと、自分でも不安になってしまう。

私は、ボランティアが行動するのはある種の「報酬」を求めてであるからに違いないと考える。

・・・(中略)・・・

ボランティアにとっての「報酬」とは、もちろん、経済的なものだけとは限らない。その人によっていろいろなバリエーションが可能なものである。私は、ボランティアの「報酬」とは次のようなものであると考える。その人がそれを自分にとって「価値がある」と思い、しかも、それを自分一人で得たのではなく、誰か他の人の力によって与えられたものだと感じるとき、その「与えられた価値あるもの」がボランティアの「報酬」である。

ボランティアはこの広い意味での「報酬」を期待して、つまり、その人それぞれにとって、自分が価値ありと思えるものを誰かから与えられることを期待して、行動するのである。その意味で、ボランティアは、新しい価値を発見し、それを授けてもらう人なのだ。

ボランティアの「報酬」についてわかりにくいところがあるとしたら、その本質が「閉じて」いてしかも「開いて」いるという、一見相反する二つの力によって構成されているからではないだろうか。

人が何に価値を見いだすかは、その人が自分で決めるものである。他人に言われて、規則で決まっているから、はやっているからとかという「外にある権威」に従うのではなく、何が自分にとって価値があるかは、自分の「内にある権威」に従って、つまり、独自の体験と論理と直感によって決めるものだ。その意味で、価値を認知する源は「閉じて」いる。

「内なる権威」に基づいていること、自発的に行動すること、何かをしたいからすること、きれいだと思うこと、楽しいからすること、などが「強い」のは、それらの力の源が「閉じて」いて、外からの支配を受

けないからだ。しかし、ボランティアが、相手から助けってもらったと感じたり、相手から何かを学んだと思ったり、誰かの役に立っていると感じてうれしく思ったりするとき、ボランティアは、かならずや相手との相互関係の中で価値を見つけている。つまり、「開いて」いなければ「報酬」は入ってこない。このように、ボランティアの「報酬」は、それを価値ありと判断するのは自分だという意味で「閉じて」いるが、それが相手から与えられたものだという意味で「開いて」いる。

・・・(中略)・・・

ボランティアの「報酬」は「見つける」ものであると同時に「与えられる」ものであるということは、新しい価値が「報酬」として成立するには、ボランティアの力と相手の力が出会わなければならない、つまり、つながりがつけられなければならないということだ。

・・・(中略)・・・

空けておいた「ふさわしい場所」に相手から力を注ぎ込んでもらい、それが自分にとって価値があると感じたときに、ボランティアは「報酬」を受け取ったのである。助けるつもりが助けられたと感じ、与えているつもりが与えられたと感じる。ボランティアの「不思議な関係」の秘密は、この「つながり」というところにあったのだ。

情報との関係でいうなら、ボランティアにとっての報酬は、「情報をもらう」ということである。ここで情報とっているのは動的情報のことである。つまり、ボランティアにとっての報酬とは、「耳よりの話がありますよ」というような、すでにある情報を教えてもらうことで得をするということではない。自分が始めたネットワークのプロセスを相手が尊重し、その人なりの反応によって受けとめてくれるということで、交流が生まれ、動的情報が発生する現場に立ち会うということが、ボランティアにとっての報酬なのである。

ボランティアの関係性を不思議なものにしているもうひとつの理由は、ボランティアの「報酬」を誰からもらうのかということに関して、通常のビジネスにおける取引先との関係や友人関係とは異なる原理に基づくプロセスが展開する可能性だ。

ボランティアは、規則にしたがって、決められたことを決められた相手とするのではないので、行動をする過程でつぎつぎと、予期しない、いろいろな人とかかわることになる。実際、ボランティアが行動を起こすとき、たいていの場合、さまざまな人に協力を要請することになる。そのプロセスで、「面倒臭いことを頼むな」と文句をいう人もいれば、結構興味を持ってのってくれる人もいれば、こちらから頼まないのに思わぬ親切をしてくれる人も出てくる。

その「結構興味を持ってのってくれる人」や「思わぬ親切をしてくれる人」が、あなたに呼応してくれたというわけだ。したがって、あなたはそのタイミングを捕まえて、ひとことお礼をいうなり、気持ちを伝えるなりすることで、その人とつながりがつけられることになる。ボランティアの目指している「つながりのプロセス」における「相手」というのは、はじめからこの人、と決まった特定の人とは限らないというわけだ。

・・・(中略)・・・

ボランティアが「報酬」を受け取ったとき、とくにうれしいと感じるのは、それが、契約に指定されたとおりに予定された人から得られたものでも、権力によって、強制によって得られたものでもなく、思いがけない人から、思いがけないときに、思いがけない形で与えられるからである。与える方はそれほどのものでないと思っているのに、与えられた方としては非常に大きなものであるといったギャップがしばしばある

ことも楽しいことだ。

困った人を手助けしようという動きまわるうちに、自分も困ったことになる。そんなとき助けてくれる人は、突然現われる。こちらが探すのではなく、向こうからやってくる、という感じがするときがある。そうになったのは、自分で「ふさわしい場所」を空けられたからだと感じるのはいずれしいものである。

われわれのほとんどにとって、ひとりの人がかかわれるのは、身近な、ほんの些細なことではかない。しかし、その小さな行動が「つながりのプロセス」を始動させることになれば、意外な展開を引き起こすことができるかもしれない。意外な展開を「引き起こす」というより、それに「巻き込まれる」といったほうがいいだろう。自分の力だけでことを運んで行く必要はない。意外な展開が巻き起こるときには、あなたがすることは「ふさわしい場所」を空けておくだけで、後は他の人が、次から次へと自分から登場してきて力を流し込んでくれるのだ。そうするうちに「つながりのネットワーク・プロセス」は、あなたを、思ってもみないほど遠くに連れていってくれるだろう。

(出典：金子郁容著『ボランティア——もうひとつの情報社会』岩波書店、1992年、148-156ページ。設問の都合上、見出しは省略した。)

【問1】 筆者が考えるボランティアの「報酬」とはいかなるものか、簡潔に要約して説明しなさい。

(400字以内)

【問2】 あなたが実際に体験又は見聞きしたボランティア活動から具体例をひとつ紹介し、続いて筆者の考えに照らしながら、その活動からどのような「報酬」がどのように得られたかを考察し、論じなさい。(800字以内)